

2018年7月21日

山口西田読書会（第179回）
第178回（7月14日）の Protokol

[哲学的問い]

直観があったとしても、高次元の直観を低次元の表現で言いあてることができるのか？ との問いかけがなされたが、問いの意図を確認するにとどまった。

[ここまでの概観]

心理学を援用して純粹経験を説明した『善の研究』時代の説明（心理主義）を反省した西田は、心理学よりも根本に立たなければならない哲学として、徹底的に純粹経験の立場から意識現象の全体像を説明しようとする。そして、自分で自分を見るとき、見られる自分と見る自分にズレが生じるエンドレスな状態「自覚」によって「直観」と「反省」を結びつけようとした。直観する自己と反省する自己はどちらも自己であるが、自分が自分であるとはどういうことか。

西田のいう実在は活動だから、見る視点によって動と静のちがいがあがるのではないかと意見があった。

[テキスト]

西田幾多郎「直観と意志」（旧全集）の第3段落中ほど「永遠の真、永遠の美は」（45ページ）より「永遠の真理を見るのである」（46ページ）までを読む。

ここに「無限なる我々の意志は一者の直観に達する過程である」とある。44ページにも「意志の極致が直観である」とあるが、無限なはずの意志にそもそも極致があるのか？ が問題になるかもしれない。

「動即静」「静即動」の動は意志、静は直観に対応している。また「動力因と目的因」は動力因が意志に、目的因が直観に対応しており、これが別れているとき時間が意識される。また「映された自己」を自己として見ているのが私たちの日常ということになる。

また、動力因（意志）と目的因（直観）が分かれているとき意志は直観の手段であり、直観が意志を動かしているときには直観が意志に従属しているとも言えるのであり、直観と意志は一つのものとして働いている。その場合、時は形式的な目的的统一であり、内容ある時であり、形式的な直観でもある。進みゆくものと還るものとの合一、動と静との合一が永遠であり、直観は永遠である。

46ページ冒頭の「萬物の自己たる一者」という表現は、意識現象の根本としての自己は宇宙の根本と同じものであるとの理解からくる。

[今週の哲学的問い]

真理とは陰影によって描きだす光にすぎないのではないかと

陰を描くことで光を表現するデッサンのように、光の部分には何も描かれていないのではないかと。真実と呼ばれるものの多くは、そのように蓄積される陰が描きだしてしまっただ

と考える。光の実在感が個人の闇の反転として「存在」するとしたら西田哲学と矛盾するだろうか？

《補足》陰が描出した光は陰に対立していない。これは二項対立ではない。「陰でない」「黒くない」と言った瞬間に二項対立化することはあるが、それは表現の便宜にすぎない。その意味で「空」も「無」も表現として失敗している。意味を持っているのは闇の方であり、空も無もそれ自身に意味をもとめることはできない。動に対する静もこれに似ていて、動は陰に、静は光に対応する。

(筆記：岡部)